

# ねこばあちゃんとかタマ

## 黒羽英二

「ゆるしておくれよ、タマちゃん」

ねこばあちゃんの声は、泣いているのか、掠れていて、よく聞こえないところがあった。でもタマには、いつもよりはっきり聞こえてきた。その言葉より、ねこばあちゃんの、思いつめた悲しい気持ち、まっすぐ伝わってきたのだ。

にゃおう、と思わずタマもかなしくなって鳴き返した。それは古いねこケージの中で、すり切れた古い茶色の皮で八つの角を留めてあり、今のタマには少し狭くて窮屈だった。どのねこもそうだろうが、タマもせまいねこケージは大きらいだった。いつもなら、もつと鳴いて暴れて、ねこばあちゃんを困らせるところだったが、今日のタマは、おとなしく、じっとして、ねこばあちゃんがケージを運ぶのが楽なように蹲まっているようにさえ見えた。

「こんなにおとなしく、いい子にして。……やっぱりタマちゃんにもわかるんだねえ」

硬くなった古い皮の、ケージの取手を、皺だらけの両手

でいて大きな長い椅子のような形のものや、なにか食べものなんかのせられそうなテーブルみたいに出っ張った岩もあり、草がびっしり生えている寝床のような場所まで、その広場には揃っていたのだ。

にゃおう、とタマは、ここはねこばあちゃんとか度も来たことあるよね、と言った。

「そうよ、タマちゃん。タマちゃんが捨てられて、みゃあみゃああって、かわいい声で鳴いていたのも、その草むらよ。だからタマちゃんの生まれ故郷って言うてもいいんだよ」

その話は何回聞いたかわかんないよ、とタマは、にゃあ、と鳴いた。

ねこばあちゃんは長椅子の形をした岩の上に、どっこいしよと声をかけて腰をおろすとケージの扉を開けて、タマを外へ出してやった。

「タマちゃん、ゆるして」

とねこばあちゃんは、ケージから外へ出たタマを、ぎゅつと両手で抱きしめて、やせた胸に抱きあげ、頬ずりしながら、

「ばあちゃん、今まで何匹もねこ暮らしてきてね、ねこばあちゃんなんて名前までつけられて。いえね、この名前好きだよ。ちつとも嫌じゃなかった。だって、ほんとにねこばあちゃんなんだからね。でもタマちゃんほど、ばあちゃん、気の合ったねこはなかったよ。好ききらい言っちゃ、

で、小さいからだを前かがみにして、しっかりと抱きかかえると、砂浜へおりの小さな石段を、一段ずつ踏みしめて行った。その足どりは、とても八十歳とは思えない確かなものだった。

にゃお、と短くタマは鳴いて、

（わかっていますよ。いつものところへ行くんですよ。でも、それから……）

なにか、かなしいことをしようと思ってるんですね、と言うように、にゃおう、と長く鳴いた。

「そうよ。いつものところ。タマはおりこうさんだから、なんでもよくわかるのよね。なんでもお見通しなのよ、ね」  
丈の低い、短い草がびっしり生えている硬い岩の上の細い道を、ねこばあちゃんはどうん歩いて行った。

にゃお、とタマは鳴いて、逃げたりしないから、ケージから外へ出してよ、ねこばあちゃんだって、重くてたいへんでしょ、と言いたかった。

「心配しないでもいいのよ。タマちゃんは家ねこだから、岩の上の道歩くの、なれてないでしょ。それにタマちゃんが砂の上走って行って、波がざぶんとくるところまで行っちゃうと、ばあちゃんもたいへんなのよ」

ねこばあちゃんの声には、いつもの元気が出てきたようで、よかつたな、とタマが思う間もなく、まるい形の、まるで相撲の土俵みたいな広場へ着いていた。同じ岩ででき

ほかのねこにわるいけど、ほんとに、タマちゃん、お前とは性が合ったんだね。手術して子供生めないからだにしちまったもんだから、タマちゃんは、おかあさんにもおばあちゃんにもなれなくて、ごめんね。ゆるしてね。タマちゃんも十二歳になって、人間なら六十歳ぐらいだから、まだまだなんだから、がんばってね。ここにいれば何とかなるからね。連れて行ってくれる人来るかもね」

と、泣きながらタマを岩の上におろした。岩の先には砂浜が五十メートルぐらい広がっていて、大きな青い海につながっていた。海の向うにはうっすらと低い山が延びていて、大きな赤い太陽が沈むところだった。

「ああ、病気のことなんか訊かないでくれ。ただわかってることは、あした、入院したら、きつともう出てこれられないってことだけなんだよ。だからタマちゃん、ゆるして。さ、お日さまの沈む方へ行っていいんだよ」

だがタマはその場を離れなかった。ただ、にゃあと長く鳴いただけだった。それは、すぐ一緒になれるから、ばあちゃん、そんなになしがることはないよ、という意味だったのだ。